

新しい研修スタイルの提案

富山大学人間発達科学部附属特別支援学校型研修モデル

「学びあいの場」

“自分らしい授業づくりを支える学びあい”

“自分らしい授業づくりを支える学びあい”は、教えあうのではなく聴きあうことを通じて、様々な視点を踏まえて自分自身で気づき、発見するといった、豊かで主体的な学びを目指します。

同僚が子供と同じ目線に立ち、学習に参加する姿勢で授業を参観しながら、授業者の働きかけや子供との関わりを俯瞰します。そして、授業で起きた事実を基に、その時の子供の実態の捉えについて授業者に聴いたり、自分と授業者の解釈に違いがあれば、その要因を明らかにするために聴きあったりすることを通じて、授業者の気づきを促し、全ての子供が主体的に学びに参加できる授業にするための糧とします。



同僚が学習に参加して、担任と一緒にになって一人一人の子供の実態を把握する機会

学びあい高め合う

授業者が、自らの働きかけの背景にある子供の捉え方を、対話を通じて掘り下げる機会

「学びあいの場」のプロセス

①事前の解説

(フリーフィング)
授業者の授業に臨む思い、現在の悩みを記述し、同僚に伝えます。

授業改善

「学びあいの場」での気づきを積み重ねることで、それぞれが自分らしい働きかけを模索し続け、授業改善に活かします。

②公開授業

同僚は、授業者の悩みを踏まえながら、学習に参加して、子供の姿や教師の働きかけを詳細に観察します。

⑥振り返り

(協同学習リフレクション)
授業者は、一連の学びあいを振り返り、悩みの原因(糸口)について整理します。一方、同僚は、各々の気づきや学びを言語化し、これを互いに聴きあいます。

③振り返り

(授業リフレクション)
授業者は、公開授業を振り返り、授業における不快感をもった働きかけについて省察します。

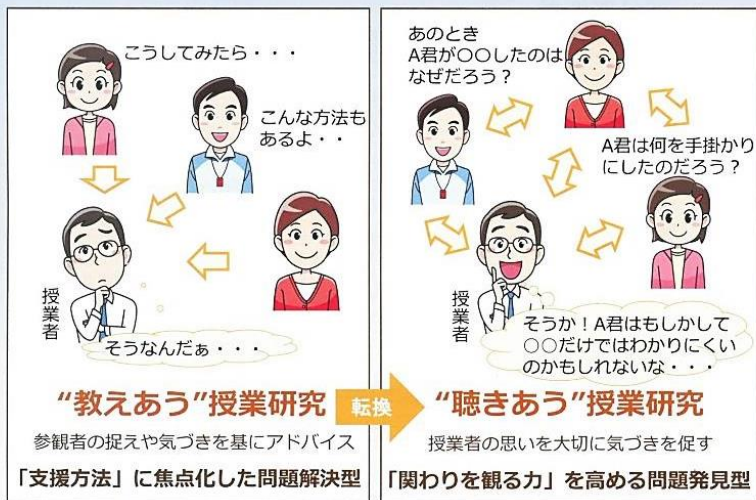
⑤授業者への聴きあい

(アクティブ・リスニング)
同僚は、気になった場面の子供の行動について授業者の捉えを質問します。授業者は、自分なりの考えを語ります。プロンプトは、授業者に寄り添いつつ両者に聴き返ししながら、授業者自身に不快感の原因の気づきを促します。

④同僚の学びあい

(ラベル・コミュニケーション)
同僚は、授業での事実を基にした場面を出し合います。そして「なぜ、子供はこうしたのか」についてお互いの考えを聴きあいます。その際には、子供の目線で考えることに加えて、授業者と子供との関わりを俯瞰して考えます。このような自分達の捉えを踏まえたうえで、その中から、授業者何れをどのように聴くかを相談します。

富山大学人間発達科学部附属特別支援学校



富山大学人間発達科学部附属特別支援学校

教師としての力量を高めるには・・・

① 児童生徒の実態把握

② 指導目標の設定

③ 指導内容の工夫

④ 指導方法の工夫

⑤ 実践・評価

指導方法等の専門的なスキル

この部分に焦点があたりがち

関わりを観る力
子供を捉える力

この力を
授業者も参観者も
高めていこう
というアプローチ

<授業改善の視点>

ラベル・コミュニケーションというしかけ

「事実の「黒ラベル」と質問の「赤ラベル」」

① 黒ラベルの書き方

例えば・・・

<算数>
(問題) 300円 持っています。買える物は、どれでしょう。

320	350	280	240
430	490	510	550

Point

黒ラベルには、事実を書きましょう。「解釈」が入らないようにすることが大切です！

Point

Aさんが、320円を選び、「合っていますか」と聞くと、Bさんは「違います」と答えた。先生が「どうして違っていると思いましたか」と聞くと、Bさんは黙っていた。

② 赤ラベルの書き方

Point

Point

Point

Point

③ ラベル・コミュニケーション

観察者それぞれの「解釈」を重ね合わせましょう！

Point

Point

Point

Point

Point

Point

Point

Point

Point

ラベル・コミュニケーションのよさ

- いろいろな立場の教員が対等に話し合える
- 参加者が役割を持ち、主体的に参加できる
- 同僚同士聴きあうことで、コミュニケーション力を高めることができる

授業観察時は ABA 行動分析の要領で教師が「いつ」「どのような働きかけを行い」「子供がどのような行動を取った」ということを客観的に記述し、研究会では授業者のねらいや課題認識を踏まえて質問ラベルを作成し、観察者それぞれの「解釈」を重ね合わせていく。参観者はまず、授業の分析的な観察力が求められ、研究会での討議で様々な解釈を共有することで、多角的に子供の学びに気づくことができる。

何故今、「学びあい」か……

富附特支はこれまで「子供達がどやったらできるか」という支援方法に焦点を当て「教え合う授業研究」を続けてきた。しかし「同僚参観者が授業者の目線に立つように努めながら一緒になって考えていく」という授業者の為に尽くすという授業研究のパラダイム転換を行っている。この取り組みは、一人一人の子供の教育にできる限り皆で責任をもつという教師の態度変容に繋がり、多様な意見と同僚の支えにより授業者の気づきを促し、子供を捉える力量を高め、同僚性を高め合う活動へ繋がっている。

多角的な子供の学びの気づき、子供の情報共有、同僚性の高まり

授業改善と学校改革は車の両輪！

- ### 富山大学附属特別支援学校の学校改革の取り組みとヴィジョン
- ① 富附特支研修モデル「学びあいの場」の推進 (子供を捉える力のUP)
 - ② 校務合理化による多忙解消 (定時退勤、時程の見直し、業務量の削減等)
 - ③ 校務情報化の推進 (効率良い議題検討、業務の見える化、会議の削減等)
 - ④ 教育課程の抜本的見直し (プロジェクト型カリキュラム、年計の見直し等)